

東方(大東亞)産の麴類(Ⅳ)

山 崎 百 治

第4編 満洲産麴類

1 緒 言

I. 住 民

1. 上古時代

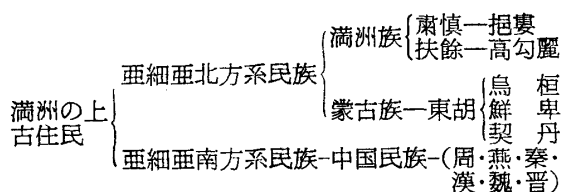
1. 満洲民族・蒙古民族・中国民族

(1) 古来満洲に活躍した民族は、満洲民族・蒙古民族・中国民族である。就中、最も重要なものは満洲民族で、肅慎・挹婁・扶餘・高句麗等と縁が近く、総括して通古斯族(ツングース)とも云われる。

(2) 蒙古民族は東胡・鮮卑・烏桓・契丹等の名で、満洲の西部・東部蒙古方面に現われていた。

(3) 中国民族は中国本土の河北・山東方面から、満洲南部に移住した。

(4) 以上を図表すると次の如くなる。



2. 諸族の興亡

(1) 肅慎は略々3,000年前から約1,000年間、吉林省牡丹江を中心として満洲の東北一帯に、拡がっていた。挹婁は前者と同じ系統の種族で、同じ地方に住んでいたが、支那史には約2,000年前頃に現われた。両者は多く石器を使用し、狩猟を営み、其の獲物を中国民族と交易し、時として南方文化地域に侵入した。後、彼等は勿吉・靺鞨・女直・女真等と呼ばれ、満洲住民の主流をなすのである。

(2) 扶餘は元来、中国の北方にいた貊種族の後であると云われる。2,200~2,300年前に、吉林省の西部農安県(長春の北)附近の肥沃な平地に土着して農業を営み、中国と交通貿易しながら、国を造つて第5世紀頃まで存続した。彼等は肅慎・挹婁・高句麗に文化的影響を与えた。

(3) 高句麗は扶餘の分家である。西紀前37年に、鴨緑江の上流に高句麗国を立てたが、次第に強大となり、

第4世紀の中葉には平壤に都し、其の版図は北鮮と満洲の大部分を併せた大国となり、盛に中国南北朝時代の文化を輸入して、學術・仏教・芸術等を発達せしめた。然し、西紀668年に唐の高宗に滅ぼされた。

(4) 渤海は挹婁の後といわれる靺鞨族の国である。西紀713年に唐の玄宗から渤海郡王に封ぜられて、渤海国と称し、後、其の領域は満洲・沿海州・朝鮮の一部に亘る大地域となつた。唐の文物の流入によつて、満洲空前の文化世界を現出した。

3. 考 察

(1) 「嚼米為酒」(『天下一統志』89巻・女直風俗)とある程であるから、彼等と関係の深い肅慎・挹婁・勿吉・靺鞨・女真等には、麴類利用の酒類は無かつたのではあるまいか? あつたにしても、極く一部で造られたに過ぎないであろう。

(2) 「祭天国中大会連日飲食歌」(『三国志』巻30・扶餘)とあつて、大量造酒が推定されるから、麴類を使用したものであろう。中国文化を輸入した高句麗・渤海国等にあつては、中国式造酒法を採用したものと思われる。

(3) 満洲南部に移住した中国民族に至つては、彼等固有の造酒法を踏襲したに違いない。

(4) 要するに、上古時代に於て、地域により、種族・民族により濃淡あるにしても、麴類を利用する中国式造酒法が、満洲で行なわれたとすべきであろう。然し、蒙古民族は、今日に於ても獸乳原料の酒類を持つてゐるに過ぎないから、當時に於ても同様であつたろう。

2. 中古時代

1. 遼(契丹)

(1) 契丹族は蒙古民族と満洲民族の混血したもので、蒙古系を多分に持った種族であつたが、西紀916年に契丹国を称した。其の領域は東は吉林・西は中部蒙古・南は北京・北は西比利亜の南境に達した。

(2) 遼の聖宗時代には、其の領域が東は日本海・西は天山附近・南は河北及び山西の北部・北は蒙古の中

部に達し、朝貢国は高麗・回紇・吐蕃等の60余国に達した。

2. 金

(1) 金の太祖は女真の部落長として威勢を張っていたが、1114年に寧江州（哈爾濱の西南）に於て遼軍を破り、翌年大金と称した。

(2) 金は宋を江南に逐つて北中国を占め、遼古乃の如きは都を會寧（吉林）より燕京（北京）に遷し、中国の統一を計らんとさえしたが、1234年に蒙古に滅ぼされた。

3. 元

(1) 中国の塞外には満洲民族・蒙古民族・土語古民族があつたが、其の中の蒙古民族は遼・金に次いで中国本土に侵入し、塞外民族が成就し得なかつた、中国統一を成し遂げ、終に亜欧に跨る大帝國を建設した。

(2) 成吉思汗の西征当時、満洲の北部と東蒙古とは彼の弟に領せられていたが、南満洲には耶律留哥と蒲鮮萬奴とがいた。前者は契丹人で開原に都していたが、後、太祖に降り、萬奴も太宗の時に蒙古に降つた。世祖の時には満洲一帯が元朝の直轄となつた。

4. 満蒙中古時代の文化

(1) 満蒙両民族は元来素朴未開な遊牧民族であるが、遼・金・元と政治的に発展して、中国或は西域の文化に接し、或る程度の発達をなした。然し、清朝の如く中国民族に同化される様なことは無かつた。

(2) 蒙古の興起により東西の交通が盛んとなり、西域の天文・地理其の他の學術が元朝に伝つた。然し、満蒙への影響はまだ無かつた。

5. 考察

(1) 満蒙両民族が中国・西域に多くの交渉を持つに至つたにしても、該地域の住民が多数に移住して来た訳ではなく、日常生活に対する影響は多くなかつた。

(2) 従つて、満蒙地域に於ける造酒業に対する影響は、上古時代に一步進めた程度に過ぎなかつたであろう。

3. 近古時代

1. 明朝と満蒙

(1) 明の太祖は金陵（南京）に於て帝位に即き北伐を行なつた。元の順帝は燕京を捨てて開平（東蒙古）に逃げ、更に應昌（熱河省）に走つた。

(2) 韃靼は元の餘衆で、瓦剌は蒙古の一部であつた。彼等は塞外にあつて強大な時には明の北境を犯し、屢々交戦した。

(3) 南満洲は古来の遼東で、明の直轄地であつた。

明は遼陽に遼東都指揮使司を置き、民政・軍政を統轄させ、辺牆を設けた。此辺牆以外は明の所謂羈縻地方で、数多の女真諸部が独立割拠していた。女直は明人が満洲人を呼んだ名称であつて、後に建州女真・海西女真・野人女真の三部に分れた。後に清朝を興したのは建州女真である。

(4) 明朝の衰微に乘じ女真諸部は次第に其の羈縻を脱し、独立の勢を示したが、建州女真に努爾哈赤（ヌルハチ）が出で、満洲から明の勢力を一掃した。

2. 明勢力の関内退去と清の統一

(1) 清の太祖は撫順・瀋陽を攻略して、都を瀋陽城に遷した（西紀1625年）。更に山海関を越えて明を征討せんと欲し、先づ遼西の攻略に着手したが、志を果さずして歿した。

(2) 二代の太宗は後顧の憂を断つために、朝鮮を征服して朝貢国となし、次いで大軍を率いて遼西に進出し、更に直隸・山東の80余城を降し、北京を孤立せしめた。斯くて関外の満洲一帯は清の統一に帰し、明の勢力は関内に止まつた。

(3) 三代の世祖は、明將吳三桂を助けて逆賊李自成を討つと云う美名の下に、容易に北中国を占領して、都を瀋陽から北京に遷し、長久に天下に君臨する旨を布告した（1644年）。

3. 考察

(1) 明が遼東地方を統轄した或る期間を除いては、満洲一帯は土著種族の活躍に委せられた。遼東は上古以来中国民族の植民地であつたから、大した変化は無かつたであろう。

(2) 土著種族が如何に跋扈・跳梁せしも、住民の日常生活は簡単に変るものでなく、中国式造酒法が特に普及したとは思われない。

4. 近世時代

1. 清朝前期（太祖～高祖・約180年間）

(1) 明朝は遼東の中国民族を保護する為に辺牆を築いたが、清朝は其の発祥地に中国人・蒙古人の侵入を防ぐために、柳条辺牆を造つた。

(2) 清初、北京遷都と共に満洲旗人等は中国本土に移住し、又在満の中国人は清初満洲の動乱を避けて、本土に帰還したものが多く、一時都市はさびれ、耕地の荒廢が甚しかつた。

(3) 清朝は順治年間に、遼東招民開墾令を發布して、中国人の満洲移住を奨励した。移住者は其の地の役所に入籍を願い出で、其の保護を受ける代りに丁銀を納めた。然し流民の密移入者も漸増する有様で、清朝発

様の地が中国民族に占領される恐れを生じた。取締を嚴重にしたが其の効は挙がらなかった。

2. 清朝後期(仁宗以後)

(1) 中国民族の満洲移入は、乾隆末期～嘉慶に年々甚だしく増加し、度々の禁令も殆んど効果が無かつた。嘉慶以後は内外ともに多事で、各関口の取締も弛んだので、移住者は頓に増加した。

(2) 露国の圧迫に対し、「招民実辺」により数の力で対抗せんとしたが、官僚の間に意見の対立があつて、方針が一定しなかつた。夫れにも拘らず、実際に中国人の移住者は年とともに増加し、奉天省・吉林省・黒竜江省には田園が開拓され、多くの都市・村落が形成された。夫れ等移民の中堅は、山東・河北の農民であつた。

(3) 要するに、清朝の抑制・禁止等にも拘らず、中国本土特に山東・河北の農民は続々満洲全土に移住し、満洲民族は著しく影が淡くなつた。彼等移民と共に、山東・河北の造酒法が移植されたことは当然であろう。

5. 摘要・考察

1. 肅慎・挹婁・扶餘・高句麗・勿吉・靺鞨・女直・女真・渤海等の満洲諸民族と中国との関係は、時代・地域によつて濃淡があつた。濃い処では中国式造酒法・淡い処では口嚼酒法などが行われたであろう。而して、蒙古民族は固有の乳酒を造つたであろう。

2. 遼・金を経て、元が欧亚に跨る大帝國を建設したが、三国を通じて、満洲諸民族の生活に対する影響は多くなかつた。造酒事業の如き、前時代よりも一歩進んだ程度であつたろう。

3. 明代を経て清代になると、中国民族の満洲移民・流入が多くなり、禁令などは効果が無かつた。特に後年には、移住を奨励する傾向さえあつたので、山東・河北の農民が続々満洲全土に移住し、満洲民族の影は著しく淡くなつた。従つて、満洲全土は中国特に北中国の造酒法によつて、風靡さるに至つた。

II. 現住民

1. 現住民と麴類

1. 第二次大戦前、満洲に於ける諸民族と彼等の使用麴類は、次の如くであつた。

(1) 中国民族 中国固有の餅麴類で、黄酒用麴子と高粱酒用麴子とを持つていた。

(2) 満洲民族 中国民族と同様であつたろう。

(3) 日本民族 日本固有の撒麴の中、清酒用麴を多量に使用していた。近来、焼酒用麴・黒麴等を使用するものが増加の傾向にあつた。

(4) 朝鮮民族 彼等固有の麴子特に粗麴を極く小規模に造つていたらしい。中国民族の麴子類を代用するものもあつた。

2. 満洲民族特有の麴類は無く、其の製麴法は上古に中国から伝えられたか、移住中国民族が満洲で其の方法を実施したかである。夫れは餅麴類に属する麴子類で、酒薬類は無い。日本朝鮮両民族に属するものは既述したから、茲に繰り返さない。

2. 餅麴類

1. 餅麴類を広義に釈解すれば、麴子類・酒薬類・神麴類を包括し、狭義とすれば麴子類のみを意味する。後の意味の餅麴類が太古に中国民族によつて発明されたことは、既に詳しく述べた(『論攷』参照)。其の餅麴類は古来より久しく、黄酒用として使用されたが、焼酒製法が伝来するに至つて、所謂高粱酒用にも利用さるに至つた。

2. 満洲に於ても、始めは黄酒用として、伝来したものに違いない。夫れが高粱酒製造にも、利用さるに至つたもので、多分明代のことであろう。明朝が、遼陽に役所を置いて、遼東を統治した頃に、同地に高粱酒製造法が中国本土から移植されて、今日に至つたものではあるまいかと思う。遼陽は現在談酒の本場となつている。

3. 遼陽が有名になつたのは、原料の豊富廉価・技術の優秀・大量生産其の他の事情が、相俟つてのことであろうが、高粱酒が寒地の飲料として、好適であることも見逃せまい。談酒の製造が盛んとなり、他地方に勃興するに及び、黄酒類の製造は衰えていつたであろう。是は必然的に、麴子類製造の消長にも関係することは、云うまでもない。

3. 研究試料の麴類

1. 満洲に於て、最も重要な麴類は、高粱酒用麴子類である。昭和7～8年、当時の奉天省公署・実業庁長徐紹卿氏の尽力により、多数の談麴子類を蒐集するを得て、研究試料とした。其の際、製造方法其の他に関する調査資料も贈られた。茲に、徐氏に対し、深甚なる感謝の意を表する。

2. 研究試料の番号・産地等は、第4.1表の如くである。

(228)

資 料

第4.1表 満洲産高粱酒用麴子類の番号・名称・産地・焼鍋名

番 号	名 称	産 地	焼 鍋 名
M 1		奉天省・撫 順	満洲造酒株式会社
// 2		// //	増 益 泉
// 3		// 撫順県・搭連咀子	源 発 和
// 4		// // //	漚 発 和
// 5		// 鉄 嶺	人 和 勝
// 6		大 連・西崗子・福德街	雙 興 泉
// 7		// // 大竜街	徳 生 泉
// 8		// // 永楽街	義 祥 泉
// 9	白 酒 麴	奉天省・鎮東県	永 順 茂
// 10	酒 麴	// 營口県	同 聚 源
// 11	酒 麴	// 撫順県境	増 益 東
// 12	白 酒 麴	// 鎮東県	衡 興 公
// 13	//	// //	和 盛 泉
// 14	酒 麴	// 義 県・西 街	広 益 永
// 15	白 酒 酒 麴	// 胆楡県	作 新 湧
// 16	酒 麴	// 北鎮県・溝帮子	長 慶 湧
// 17	//	// 黒山県	徳 順 湧
// 18	焼 麴	// 鳳城県・南大街	徳 豊 泉
// 19	大 麦 麴 子	// 臨江県・八道江鎮	聚 隆 泉
// 20	酒 麴	// 遼中県・第一区肅塞門村	永 興 順
// 21	焼 酒 麴	// 海城県	大 興 泉
// 22	酒 麴	// 四平街	泰 和 益
// 23	//	// 興城県・北 街	福 源 合
// 24	//	// 洮 南	徳 興 合
// 25	酒 麴	// 柳河県・三源浦	源 興 泉
// 26	香 麴	// 寛甸県・長嶺子村	恒 泰 長
// 27	酒 麴	// 法庫県・北桃源山	福 祥 海
// 28	//	// 錦 県	同 咸 金
// 29	成 規 焼 酒 麴	// 開通県・辺昭鎮	公 興 源
// 30	焼 酒 麴 子	// 桓仁県・江 北	徳 興 泉
// 31	焼 酒 麴	// 瀋陽県・張地分所	聚 隆 泉
// 32	大 麦 酒 麴	// 瀋 陽・北門外・路西	永 泉 泰
// 33	焼 酒 麴	// 通遼県	慶 裕 久
// 34	//	// //	東 泰 隆
// 35	//	// 清原県	広 源 局
// 36	//	// 昌圖県	同 泰 祥
// 37	酒 麴	// 西安県	中 興 湧
// 38	方 塊 大 麦 麴	// 安東市・公安街	福 記 達
// 39	焼 酒 麴	// 洮安県	福 豊 合
// 40	酒 麴	// 東豊県	吉 昇 永
// 41	大麦 小 豆 酒 麴	// 興京県	萬 泉 湧
// 42	//	// //	源 泉 注
// 43	白 酒 酒 麴	// 岫巖県・本 街	興 聚 泉
// 44	酒 麴	// 綏中県	永 盛 泉
// 45	焼 酒 麴 子	// 西豊県	広 斤 泉

M46	焼 酒 麴	奉天省・海城県	玉 升 恒
// 47	酒 麴	// 鉄 嶺	人 和 勝
// 48	//	// 開原城	増 益 湧
// 49	白 酒 麴	// 新民県	慶 発 泉
// 50	酒 麴	// 奉天市・平羅堡	體 泉 湧
// 51	酒 麴	// 奉天市・北市場	永 成 源
// 52	//	// // 西小新民屯	永 興 海
// 53	//	// // 東木廠	義 盛 泉
// 54	//	// // 大東区・興京街	萬 隆 泉
// 55	白酒麴・焼酒麴	// 輝南県・県 城	海 興 湧
// 56	大 麦 麴	// 輯安県・東 崗	清 芳 泉
// 57	大 麦 酒 麴	// 公主嶺・本 街	東 海 泉
// 58	白 酒 麴	// 新民県	広 勝 泉
// 59	酒 麴	// 本溪県・枢城廠	福 興 魁
// 60	麦 豆 麴	// 瀋陽県・保安寺	永 隆 源
// 61	焼 酒 麴	// 瀋陽県・姚千戸屯村	晋 泉 公
// 62	酒 麴	// // 小北辺門	義 生 湧
// 63	焼 酒 麴	// // 城東四方台	東 興 泉
// 64	麴 子	// 撫 順	増 益 泉
// 65	//	// //	満洲造酒株式会社
// 66	苞米大麦酒麴	// 撫松県	裕 盛 泉
// 67	苞 米 大 麦 麴	// //	福 盛 湧
// 68	酒 麴	// 鉄 嶺	天 益 湧
// 69	大 麦 小 豆 麴	// 興京県	源 泉 湧
// 70	焼 酒 麴 子	// 本溪湖	永 泉 長
// 71	焼 酒 酒 麴 子	// 懷徳県・城東街	聚 昌 隆
// 72	//	// //	大 盛 泉
// 73	苞 米 大 麦 麴	// 撫松県	瑞 盛 湧
// 74	//	// //	福 和 泉
// 75	//	// //	公 和 泉
// 76	白酒麴・焼酒麴	// 輝南県・県 城	恒 興 泰
// 77	酒 麴	// 長白県	成 徳 合
// 78	//	// 瀋陽県・平羅堡	體 泉 湧
// 79	//	// 彰武県・火石嶺子	徳 益 泉
// 80	焼 酒 麴	// 通化県・東昌街	謙 泰 潤
// 81	焼 酒 酒 麴	// 瀋陽県・十里河村	義 順 湧
// 82	酒 麴	// 彰武県・本 城	義 興 泉
// 83	//	// 義 県・東 関	滙 源 湧
// 84	//	// 黒山県・新立屯	広 和 泉
// 85	//	// 洮 南	予 貞 慶
// 86	酒 麴	// 錦 県・餘積屯鎮	聚 発 泉
// 87	大 麦 酒 麴	// 遼陽県・北大街路東	慶 徳 隆
// 88	酒 麴	// // 東大街	福 聚 源
// 89	//	// //	玉 陞 湧

Ⅱ. 概 括

1. 満洲には上古以来、満洲諸民族（外に蒙古民族の一部）が住んで居たが、其の固有酒は口嚼酒の如き

原始的なもので、麴利用の酒は中国から伝承したものに相違ない。従つて、諺諸民族間に於ける中国酒普及の程度は、中国民族との接触の濃淡によるものと解せ

(230)

資

料

られる。古くから、中国移民の多かつた遼東地方などは其の最たるものであつたろう。

2. 遼・金・元・明の各代を通じて、満洲に於ける中国酒の普及は著しく無かつた。清代後期に至つて、山東・河北の農民が続々移住したので、満洲諸民族の影は淡く、中国民族に同化・吸収さる様になり、北中国の造酒法が至る処に行なわるるに至つた。

3. 現在、満洲に於ては中国民族・日本民族・朝鮮民族が夫れ夫れ固有の麴類を造っているが、其の中で最も重要なものは、餅麴類に属する高粱酒用麴子類である。本編に於ては、是に重点を置いた。

II 黄酒用麴子類

I まえがき

1. 満洲には独自の文化は少く、大部分の文化は中国本土から移植されたものであることは、緒言に於て明らかにした。麴類・酒類等に於ても同様である。

2. 現在、満洲の主要都市に於ける主なる黄酒製造家は、山東省出身者が大部分で、移植の事実を物語っている。

II 黄酒用麴子類の製造法

1. 関東州金州に於ける調査（大正12年）。

1. 小麦搗砕粒1升到水1斤を加え、捏和して捏塊

を造る。

2. 是を方形の模子に入れ、表裏両面を足にて強く踏み固め、麴胚を造る。

3. 麴胚を、土間に敷ける麦藁上に置き、麦藁にて覆う。

(1) 第3日迄は毎日1回、其の後第7日迄は毎日2回翻転し、夫れより以後は事情に応じて適當の処理を施す。

(2) 充分乾燥した「餅麴」即ち「麴子」を造るには、約1カ月を要す。

2. 製造の過去・現在

1. 調査当時、金州に於ては造られていなかった。前記の調査は同地在住の岩間徳也先生の手記に拠つたものである。相当古くから廃せられたらしく、其の原因は「操作困難で失敗が多い」と云うにあつた。満洲全土に於ても、金州同様であつたものと看做される。

2. 従つて、満洲で需要さる麴子の全部は、山東省からの移入に俟つたのであつた。満洲建国後はストック・輸入品・密輸入品等で間に合わせ、現在は高粱酒用麴子を使用したり、自製を試みたり、日本撒麴に手を出したりして、其の場其の場を糊塗しているらしい。（以下次号）

雑 報

辻阪好夫氏工学博士の学位を受く

大阪市立工業研究所第4課勤務辻阪好夫氏は予て阪大工学部に学位請求論文を提出中の処、昨年12月1日教授会を通過し2月2日学位記を授与された。

主論文——糸状菌のアミラーゼ系に関する研究

因に同氏は昭和26年3月阪大工学部醸酵工学科を卒業し、同年4月から現職に就かれ現在同所研究主任である。

大阪大学工学博士

3月23日下記3氏は首題の学位を授与された。

森本輝彦氏

論文——米麴の生理と水解酵素系に関する研究

同氏は昭和30年阪大工学部醸酵工学科を卒業の上、同32年同学大学院工学研究科修了（修士）博士過程に

進学し、36年3月修了し本月から森永製菓株式会社に就職さる。

黒田彰夫氏

論文——黒黴の遺伝学的研究

同氏は昭和30年阪大工学部醸酵工学科を卒業の上、前記森本氏と同一コースに進み本月からヤクルト株式会社宝塚工場に勤務さる。

金野範之氏

論文——工業微生物の対酸素親和性ならびに酸素適応に関する研究

同氏は昭和30年東北大学農学部農芸化学科を卒業の上、阪大大学院研究科を修了（修士）の上博士過程に進学し36年3月修了し引続き職員として研究室に残る予定。